随想(一) 爾靈山

神崎辰雄
（会員・鶴見町大島）

爾靈山といってもどこの山かと思われる人も二〇三高地と聞けば、あの激戦地、標高二〇三米の旅順の山かと高齢の方なら記憶に残っていることであろう。

昭和十五年、当時私は、旧満州電々の講習生として玄海の荒波を越えて大連に渡った。

雪が解け、五月ともなればアカシヤの甘い香りにつゝまれ、マーチョ「（馬車）」の軽ろやかなヒヅメの響きが今も懐しく甦がえってくる。かつて日本の植民地の中でおそらく最も美しい都会であったにちがいない。

現在、地図を見ると旅大という名称になって、かつての大連、旅順、金洲、そしてその周辺をあわせた市となっている。

大連から旅順までは十里の道のりである。汽車で行けば一時間で着くが、徒歩ではゆっくり一日かかる。途中に旅大八景のすばらしい景色を眺めながら、白く淡いちぎれ雲が浮かぶ異国の空、リンゴ園の青々とした木々に旅情をそそられた。

静かな森の町旅順は学徒の町でもあったが、この町の歴史はなんといっても日露戦争の激戦地であったことを、永久に忘れ去ることはできないであろう。

中でも二〇三高地は露軍と互に争奪し合うこと六回、九昼夜に及んだといわれる、旅順砲台中の要塞の地であった。

この高地だけの日本軍の戦死者七千五百名、第三軍司令官、乃木希典（まれすけ）将軍の長男もここで戦死した。

〝「鉄血、山を覆い山形改まる」〟と将軍は絶句され、ま

た、歌人與謝野寛もこの高地に登って、

〝「泣かずして旅順の山を踏みがたし、こぼるる砂もむせぶ声する」〟と激戦の跡を偲んで歌っている。高地からの眺めは実に絶佳で東鶏冠山、二龍山、松樹山、白玉山を指呼の間に望むことができ、往時の肉弾戦の追憶がよみがえってくる。

眼下には袋の形をした天然の良港、旅順港が海面もおだやかに当時を物語っているかのようであった。

火を吹く砲台を眼前に、港口に閉塞船を乗入れての必死の作業、大胆というべきか無謀というか、しかもこれが功を奏して、港内の露国東洋艦隊を完全に封じた軍神広瀬中佐の雄々しい勇気と、閉塞船に残した七生報国の悲壮の文字は、ともに忘れることはできない。

山川草木轉荒涼　十里風腥新戦場
征馬不進人不語　金洲城外立斜陽

これは乃木將軍の陣中吟詠であるが、金洲とは遼東半島の首都で古くから栄えた町で、方形の城壁を持つ金洲南山に、奇襲をかけた激戦地でもある。この地で二男も戦死した。

明治三十八年（一九〇五）一月一日、遂に旅順要塞も落城となり、乃木大將とステッセル中將が水師営の土民の家で会見することになった。

かの歌に有名な〝「庭にひともとなつめの木」〟は当時、昔と変わらず濃い緑で栄えを見せていたが、多くの弾丸の跡が痛々しかった。

かの二〇三高地の頂上には乃木將軍の筆になる「爾靈山」と刻まれた砲弾の形をした忠魂碑が建てられ、この前に佇つとおのづと頭がさがる。この山腹に部下が戦死した將軍の二人の子息のために立派な墓を建てたところ、自分の子供だけにそのような扱いをさせぬように、と除去させたという秘話が残っている。

当時はただ一つ、山の石が淋しく置かれているだけであった。將軍の清廉な気持がうかがえる。

先年、この地を訪れた同期生の話によれば、高地の忠魂碑はそのまま残っていると聞いて安堵している。

年々に咲く赤い野花だけが、殉国の華と散った勇士達のせめてものなぐさめであろうかと思うとき、とこしえに恨みはつきぬ古戦場爾靈山である。